

第166号

平成15年7月

E-mail: © 2003

shimz@mb.infoweb.ne.jp

LDG04167@nifty.ne.jp

SCだより

編集 発行 人

清水 吉男

(株)システムクリエイツ

横浜市緑区中山町 869-9

電話/FAX 045-933-0379



31回め



アルコールは置いていません

最近、日本版CMMはどうなっているのかと、よく聞かれる。私も、喫茶店のマスターという立場では、この情報を集める手立ではない。店に来る客の会話から状況を判断するしかない。SEAという組織がボランティアで「CMM」を翻訳したときは、SEIから版權の許可をとって出版にこぎつけたが、今回は、経産省が絡んだために、役所の人事移動によって方向が定まらない。2005年から「CMMI」に切り代わるといふのに、困ったものである。

さて、梅雨もうすぐ明けそうだが、この前、大阪に行ったときはミンミンゼミが盛んに鳴いていたが、こっちは、やたらと涼しいためにゼミの鳴き声は聞こえない。店の外の歩道にべったり張り付いた落ち葉を片付けて、開店の準備が整ったところに、

「マスター、おはよう」

と、ヒゲを生やした客が入ってきた。

よく見ると、常連の客である。

「おや、ヒゲを生やしてどしたの？」

何か変化させたいことでもあったのかな？」

彼は、いつもの場所であるカウンターの手前側にゆっくりと座って、出されたミネラルウォーターを飲んだ。彼は煙草を吸わないので、急いでコーヒーの準備にとりかかる。

「マスターを見ていると、ヒゲも良いかなと思って、というのは冗談ですけど。プロセスの改善が、ようやく皆に受け入れられてきたこともあって、ぼちぼち動き始めてきたのですね。ひとつ、ここで気分を変えて航海に出ようか、という感じですかね」

「ある程度、航海の準備は出来てきたということかな」

「そうですね。1年以上かかりましたね。いろいろと説得したり、協力してくれるリーダーのところまで試行してみたり、その結果を積極的に公開し説明してきたことで、プロセスの改善というものが、決して負担を増やすものではないことを理解してくれるようになったと思います。トップの方も理解してくれたようで、無意味に急がされることが無くなりました」

「そう、それは良かったね。一時的には負担は増えるけど、そんな時間は直ぐに取り返せるからね。根気よく説得し続けた成果だね」

ドリップから広がるコーヒーの香りに包まれながら、彼の表情をみる。どうやら航海に対する不安が残っているようだが、自分の不安をどう表現するかを見る意味からも、彼の方から切り出すのを待つことにしよう。今、ここにはドリップにお湯を注ぐ静かな音と、ドリップからコーヒーが落ちる軽やかな音しかない。

「マスター、メトリクスって良く分からないのですが」

なるほど、やっぱりそこかと思ひながら、

「簡単に言ってしまうと“測定基準”だよ」

とからかってみた。

「マスター、それじゃ辞書のままじゃないですか」と不満そうだ。

「ここから想像を膨らませればいい。ただ、メトリクスというのは、別にソフトの世界に限ったものではないので、正しくは“ソフトウェア・メトリクス”とする必要があるかな」

「想像を膨らますんですか。そうですね。ソフトウェアの開発工程あるいはプロセスの状態を計測する基準、と言う感じですか」

「ちゃんと想像できたじゃない。言葉の上では良いと思うよ。で、例えばどんなのが考えられるかな？」

「そうですね。マスターがいつも言っている『生産性データ』もその一つですね。実装プロセスに於ける単位時間当りの生産行数とか、全工程に於ける生産データですよ」

「確かに、それは代表的なメトリクスだね。要するに、開発工程などのプロセスの様子が、その数字に表現されることで、取り組みの効果や習得のレベルを測ったり、まだ不十分な状態やポイントを知ることができるわけだ」

彼は、出来立てのコーヒーを啜りながら、

「私が迷っていたのは、実は自分たちの学習効果をどうやって測れば良いのかということでした。マスターに教えてもらって、要求の仕様化のところに集合の概念を持ち込んだつもりでも、その出来栄を判断する方法がないと、改良のきっかけが得られないのではないかと、そうなるも、皆が好き勝手に“書いている”で終わってしまうんじゃないか、という不安があるんです」

リーダーとして、実に健全な状態だ。

「今度はその問題に臨むという気持ちがヒゲに現れているんだね」

と云われて、彼はまたコーヒーを啜って、話題が横に流れるのを防いでいる。よし、こいつは本気だね。

「メトリクスには、ソフトウェアの開発を続けるかぎり、最初から恒常的に収集すべき項目と、改善に取り組んだ事に対して計測を開始する項目がある。もちろん、その後は継続して取り組んでもいいんだが、手を付けていない間は、計測の意味を見出しにくいからね」

「生産性とか“KLOC”当りのバグの発生率などは前者の項目ですね」

「そうですね。これは恒常的に必要な項目だね」

「そうすると、取り組みに対して発生する項目というのは？」

「例えば、あなた達は要求の仕様化に取り組んだよね」

「はい、各所で取り組んでいて、表現はだいぶ安定してきたと思います」

「でも、評価の基準は無い？」

「そうです。昔の“散文”形式から“Excelでの箇条書き”形式に変えたので、『項目数』というデー

タは収集できませんが」

「でも、それで何が分かるのかってことだね。項目数とプロジェクトの規模は相関することは分かるだろうが、要求仕様の書き方が改善されたかどうかは、それでは全く見えないよね」

「そうですね」

「おいおい、“そうですね”で終わりがいい？ それじゃ情けないぜ。要求の仕様化の表現が望ましい状態になれば何が変わるか？」

「仕様関係のバグが減ると思われます」といって、その後が続かない。どうやら此処で思考を止めていたようなので、攻めてみることにした。

「それだけか？ そんなのは新人でも分かるよ」と言われて表情を変えた。此処からが勝負だ。さっき使ったネルのドリッパーをお湯で洗いながら彼の反応を待つ。しばらく静寂が続く。

「そういえば、企画部門からの“注文”が早い段階から出ているようです。それに、設計者の中で行っているレビューでも、仕様の漏れなどが多く指摘されているようです」

「その変化が、仕様化の取り組みの効果として見えていなかったのかな」

「効果のような感じはあったのですが、今、マスターに言われるまでは、強い関連を意識していませんでした」

「今日は朝から、ここに来た効果があったね」

「ということは、バグの原因別データと、レビューでの原因別データ、それと企画からでる要件変更の件数、などがあれば出来栄は測れますね」

「うーん、60点だね。要件の変更は企画からとは限らないだろう？」

「そうですね。仕様化が甘いままでは、設計や実装に入ったところで仕様の不備や矛盾に気付いて、仕様制限を加えたりしましたね。ということは、要件変更の依頼者や変更の発生時期が変わっていいれば良いんですね」

こうして考えられるところを見ると、彼は自分と対話するのがうまく無いのかも知れない。

「そうですね。要件の変更依頼書やレビューの報告書に、ちょっとした仕掛けをすれば、これくらいはデータは直ぐに取れるでしょう」

「はい、ほとんど負担はないと思われま。DBでもちょっとプログラムを定義すれば、簡単にグラフ化できますし」

「そうだよな、便利な時代だよな。昔は、データは集めてもそれを表やグラフにするのが大変だね。今は、こんなに簡単にできるので、誰もデータを取って自分のレベルを追跡しようとしな。ま、そういう人はまもなく出番がなくなるだろうが」

一つの答えが見えたことで、彼の表情がだいぶ落ち着いた。

「ところで、新しいメトリクスは要求仕様だけで良いのかい？」

「いえ、要件管理にも取り組んでいますし、PFDを使ってのプロセスの設計や、ピアレビューにも取り組んでいますので、自分で一度考えてみます。整理がいたらまた来ます」といって店を出た。

プロセス改善の取り組みは、適切なメトリクスで計測しないと、活動が続かなくなる

暁鐘の音

149

「背中」に優しくない社会

「背中」という言葉からすぐに連想されるのは、「父親の背中」であろう。日常の中で、一般に父親は母親に比べて子供に接する時間が少ないため、父親の背中を見て育つと言った部分はあるかもしれない。ただしそれには「父親としての尊厳」が条件になると思われる。

最近の少年犯罪を見てみると、「父親」の存在を感じさせない。父親が、子供の成長、特に「自己の形成」という成長過程で関わっていないのではないのか。そこでは「背中」すら見せていないのだろう。子供の目に見えているのは、社会の歯車の中で疲れ切った父親の背中であり、リストラに脅える父親の背中である。子供は、その背中からは、自分の生き方を見ることはできない。特に男の子の場合は、これは父親以上に不安な状態になると思われる。

二五年前、自動車の免許を取るために教習所に通っていたとき、教官から「後ろの車に優しい運転」をすることを教わった。前は、自分の責で見る。だから後ろに続いていく車に不安を与えることのない運転

をすることが大事と言っ意味である。私が見えている状況を後ろに伝えることも必要だ。渋滞をハザードランプで知らせるのもその中の一つだが、それを点灯させるタイミングにも配慮が必要だ。ハザードランプとブレーキランプの点灯の仕方、何通りかの情報を作り出せる。減速の場面もブレーキランプの付け方を考えれば数通りできる。これらは、ルームミラーから見える後続車の状況によって判断している。そのためか、普段、道を歩いているときも、歩行コースを変更するとき、つい振り返って「後続者」を確認してしまう。

真つ黒な排気ガスをまき散らして走る車がある。トラックに多いが、業務用と思われるワンボックスカーでも時々ある。整備の手抜きである。この排気ガスの煙は後ろを走る車にとっては迷惑千万である。このような場合には、すぐに外気の取り入れを遮断し、準警戒モードに入る。何故かって？ こういう運転手は、「背中」に優しくなく、突然車線を変えたりするからだ。

テールランプを異常に明るくして走る車も、後ろを走る者にとって迷惑である。この機能は、国産車にはほとんど付いていないと思われるが、自分の車のテールランプのことなど気にしていないのだろうか。それとも見せつけか。

最近、後続車を睨みつけるようなデザインのある車がある。夜、信号などで停車したときに、前にこの車が居ると、どうして私が睨みつけられなければならないのかと思う。メーカーのデザイナーは奇抜さを狙ったのかも知れないが、この車の後ろを走る私にとっては実に不快である。

七年ほど前にミニバイクで走っていたとき、前を走っていたワンボックス車から捨てられたたばこの吸い殻が、私のバイクに当たったことがある。もうちょっとタイミングが悪ければ、服に穴があいていただろう。いや、フルフェイスのヘルメットではないので、顔の下半分に当たってもおかしくない。窓から火の付いた吸い殻を捨てた運転手は、このような被害を与える可能性は想像もしていないのだろう。想像力の貧困である。

最近、リュックを背負って電車に乗る人が増えてきた。学生の他にサラリーマンも背広の上から背負っている。そのことに文句はない。問題は、背中に背負ったまま混んだ電車にのってくることである。後ろに立っている者にとっては邪魔になっただけではない。前に抱えるか、足元に下げて欲しいが、それを注意しようものなら命を失う危険があるので、じつと我慢している。電車の揺れを“活用”して、場所を少しずらすしかない。

ろに傘の先が残っている。小さな子供にとっては顔の辺りの高さである。大人でも、足にぶつけられそうになるため、距離をあけるかコースを変えなければ、危なくて仕方がない。これが昇り階段の場合は数段下にいる大人の顔の所に“突きつけられる”ことになる。この人にとって、自分の「後ろ」は関係のない世界なのだろうか。

新幹線に乗ったとき、後ろに人（私）が続いているのに、四人の大人が通路を塞いでどっちに座るか話しかけている。このような状態で話しかけたら、他の乗客の邪魔をする可能性があることを想像もしていないのか

出張先のホテルで見たテレビのニュース番組の中で、マリナーズのイチロー選手が語った言葉である。イチロー選手らしいと言えばそれまでだが、「プロ」として仕事をやるものにとっては、これくらいの意識でいたいと思っ、すぐにパソコンに打ち込んだ。誰も、自分がどこまで出来るのか知らない。それは結果としてしか知る方法はない。もちろん、昨日と同じことをやっていても、自分の可能性は広がらない。もっと少ない時間で出来るようになりたい。もっと変更し強いプログラムを書きたい。「もっと上手になりたい」と思っ取り組まないかぎり、それは叶わない。やってみて思っような結果にならない

今月の一言

「自分の可能性のあることまで上手になりたい」
(イチロー選手)

と思っ、じつと四人の顔を見て待っていた。しばらくしてようやくその中の一人が私に気付いて通路を開けてくれたが、この四人は、どうみても会社の「部長」クラスと思っ人たちである。会社という閉ざされた組織の中に居る状態が長く続くと、こつも社会的な感覚が鈍るのだろうか。

おつと、前の座席の人が突然シートをいっばいに倒してきた。後ろの席に人が座っていることなど「気遣うそぶりも見せない。ああ、気がついてみたら、「背中」に優しくない社会になっている。

ば、何処が悪いのか考えればよいし、関係する文献を読んだり、適当な人に相談したりすればよい。いや、そうやってでも自分の可能性を広げればよい。そうして一〇年経ったとき、自分にはもっと可能性があると思っるだろう。どんな仕事に就いても、一〇年も本気になって技術を追及すれば、相当なところまで上手く成れる。例えば「企画」の仕事の場合には、「要求アナリスト」としての技術を追及すればよい。評価部門であれば、テスト・エンジニアや、テスト・スペシャリストとしての技術を追及すればよい。多くの人が、それぞれの立場で「もっと上手く」なるうとすれば、生産性が改善されて、過労死や過労自殺も解消するはずだ。